新刊案内

名場面で読む『源氏物語』(晶子訳)

●加藤孝男・伊勢　光 編著　●体裁：A5 判・並製　約 190 頁
●定価：本体 2,000 円＋税　ISBN978-4-910672-44-1　C0093

CPC リブレ No.21

2024 年 10 月 10 日発売

いま『源氏物語』の作者紫式部を描いた NHK の大河ドラマ「光る君へ」が放送されている。本書は晶子訳『源氏物語』をテキストに、編者たちが名場面を訪ねた写真に文を添えてむずかしい『源氏物語』を気楽に読めるよう工夫したもの。名場面とともに古典の面白さが理解できる――

【目　次】

第 1 部　1 源氏の誕生（「桐壷」）2 光源氏の母・桐壷更衣の死（「桐壷」）3 皇籍からの離脱（「桐壷」）4 義母・藤壷の入内（「桐壷」）5 空蝉との恋（「空蝉」）6 夕顔の咲く家（「夕顔」）7 廃屋での逢瀬（「夕顔」）8 幼い若菜を連れ去る源氏（「若菜」）9 藤壷との密会（「若菜」）10 末摘花との密通（「末摘花」）11 青海波を舞う源氏（「紅葉賀」）12 賀茂の祭の車争い（「葵」）13 六条御息所の生霊（「葵」）14 光源氏の都落ち（「明石」）15 桐壷帝の亡霊（「明石」）16 明石入道との出会い（「明石」）17 上京する明石の君（「松風」）18 源氏、明石の姫君を引き取る（「薄雲」）19 玉鬘を養女とする源氏（「蛍」）20 覗き見る夕霧（「野分」）21 灰をかけられた大将（「真木柱」）22 引きさかれる娘（「真木柱」）

第 2 部　23 大願を成就させた明石入道（「若菜（上）」）24 源氏の妻を垣間見る柏木（「若菜（上）」）25 恋の妄執（「若菜（下）」）26 発覚した恋文（「若菜（下）」）27 紫の上の死（「御法」）28 出家の準備をする源氏（「まぼろし」）

第 3 部　29 玉鬘の娘たち（「竹河」）30 宇治を訪れる薫（「橋姫」）31 出生の秘密（「橋姫」）32 八の宮の死と残された娘たち（「総角」）33 薫と匂宮（「総角」）34 匂宮と中の君、二人を隔てるもの（「総角」）35 大君の死（「総角」）36 中の君に心惹かれる薫（「宿り木」）37 薫と浮舟との出会い（「宿り木」）38 匂宮と浮舟、宿命的な出会い（「東屋」）39 匂宮と浮舟との逢瀬（「浮舟」）40 別の顔をもつ薫（「蜻蛉」）41 入水に失敗した浮舟（「手習」）42 出家を願う浮舟（「手習」）43 浮舟の居場所（「夢の浮橋」）あとがき

一　光源氏の誕生（「桐壷」）

「いづれの御時にか」ではじまる『源氏物語』の冒頭を、晶子の訳では「どの天皇様の御代であったか」としている。桐壷の更衣と呼ばれた女性が、後宮で天皇に特別に愛されていた。後ろ盾のない更衣は、右大臣の娘である弘徽殿の女御らからいじめを受ける日々である。右大臣家の後ろ盾をもつ弘徽殿の女御は、すでに天皇との間に、第一皇子をもうけていた。そんななかで更衣は、皇子をみごもるのである。後の光源氏である。　―本文冒頭より

加藤孝男 1960 年生まれ。東海学園大学教授。伊勢　光 1984 年生まれ。東海学園大学准教授。

書店印	発行：クロスカルチャー出版　TEL：03-5577-6707　FAX：03-5577-6708	
		名場面で読む『源氏物語』(晶子訳) ■定価: 本体2,000円＋税 ISBN978-4-910672-44-1 C0093
ご担当者(　　)	冊	

かった。ただお愛しになるあまりに、その人自身は最高の貴女（きじょ）と言ってよいほどのりっぱな女ではあったが、始終おそばへお置きになろうとして、殿上で音楽その他のお催し事をあそばす際には、だれよりもまず先にこの人を常の御殿へお呼びになり、またある時はお引き留めになって更衣が夜の御殿から朝の退出ができずそのまま昼も侍しているようなことになったりして、やや軽いふうにも見られたのが、皇子のお生まれになって以後目に立って重々しくお扱いになったから、東宮にもどうかすればこの皇子をお立てになるかもしれぬと、第一の皇子の御生母の女御は疑いを持っていた。この人は帝の最もお若い時に入内（じゅだい）した最初の女御であった。この女御がする

写真は内裏の淑景舎（桐壺）のあった場所にある。平安時代の内裏は、現在の御所から西へ1.8キロのところにあった。現在の場所に移転したのは、南北朝時代のことである。現在、平安時代の内裏のあった場所には、多くの家が建ち並び、当時の面影はない。この淑景舎から天皇の御座所である清涼殿まではもっとも遠かったといわれている。

批難と恨み言だけは無関心にしておいでになれなかった。この女御へ済まないという気も十分に持っておいでになった。帝の深い愛を信じながらも、悪く言う者と、何かの欠点を捜し出そうとする者ばかりの宮中に、病身な、そして無力な家を背景としている心細い更衣は、愛されれば愛されるほど苦しみがふえるふうであった。

二　光源氏の母・桐壺更衣の死（「桐壺」）

桐壺の更衣は、心労によって病になってしまう。実家へ下がろうとするが、天皇はお許しにならなかった。そのようにしているうちに、重い病になって、実家に下がり、ついに亡くなってしまう。

御息所（みやすどころ）〔桐壺更衣〕――皇子女（おうじじょ）の生母になった更衣はこう呼ばれるのである――はちょっとした病気になって、実家へさがろうとしたが帝はお許しにならなかった。どこかからだが悪いということはこの人の常のことになっていたから、帝はそれほどお驚きにならずに、

「もうしばらく御所で養生をしてみてからにするがよい」

と言っておいでになるうちにしだいに悪くなって、そうなってからほんの五、六日のうち